

関西地区における授業アンケートの活用状況

小川絢子¹・及川恵²・大塚雄作²・石川裕之²

¹京都大学大学院教育学研究科博士課程 ²京都大学高等教育研究開発推進センター

調査概要

本調査は、昨年、関西地区 FD 連絡協議会代表幹事校である京都大学高等教育研究開発推進センターで実施した「FD 活動に関する資料・情報提供のお願い」における、授業評価アンケートに関する各校の回答をまとめたものである。

調査時期は 2008 年 6 月～9 月であり、郵送法で行った。最終的に 126 校（関西地区 FD 連絡協議会加盟校：76 校、非加盟校：50 校。内、国立大学 8 校、公立大学 9 校、私立大学 109 校）からの回答を得た。

調査内容は以下の通りである（全て自由記述式回答）。

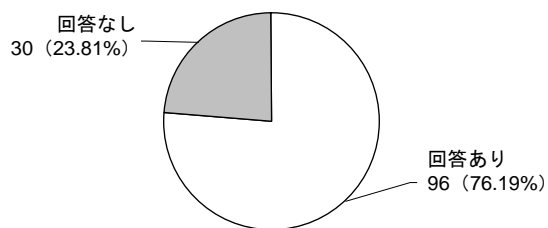
1. 大学独自の特徴・工夫点（「1.貴大学で実施されている、学生による授業評価アンケートには、貴大学独自の特徴や工夫されている点がありますか。」）
2. 授業改善のための組織的活用（「2.授業評価アンケートの結果を、授業改善のために、組織的（全学・部局等）に活用する工夫をされていますか。」）
3. 授業改善以外の組織的活用（「3. 授業評価アンケートの結果を、授業改善という目的以外に、組織的（全学・部局等）に活用されている点がありますか。」）

結果

1. 大学独自の特徴・工夫点

回答数（有効回答 126）

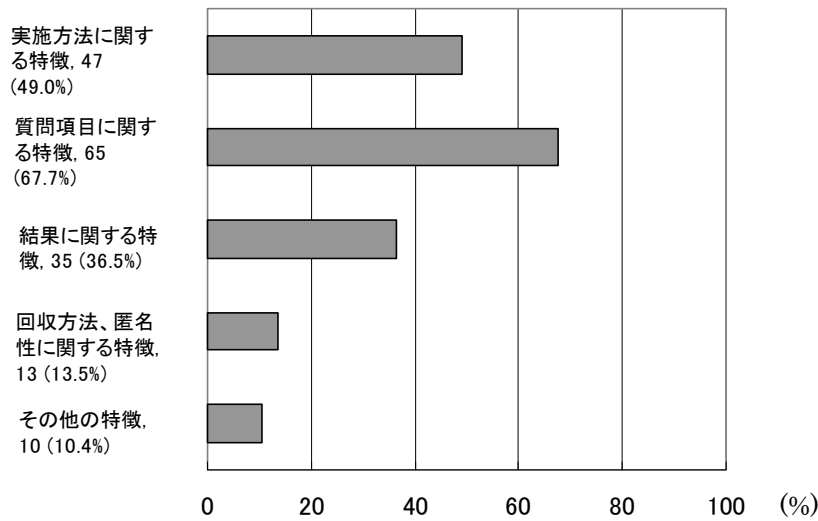
回答あり 96（76.19%）
回答なし 30（23.81%）（特になし等を含む）



授業評価アンケートの特徴や工夫に関する記述について、以下の 5 点を基準に分類した。

- 実施方法に関する特徴
- 質問項目に関する特徴
- 結果に関する特徴
- 回収方法、匿名性に関する特徴
- その他

なお、回答形式は自由記述のため、1 つの回答が複数の基準に相当する場合もある。上記の 5 つの各特徴について下位分類と回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。



■ 実施方法に関する特徴

授業評価アンケートの実施方法に関する特徴や工夫として、①アンケートの実施範囲と実施時期、②入力方法等についての記述がみられた。

（回答例）

① アンケートの実施範囲と実施時期

- ・ 2007年度までは、2年間で全授業科目（全開講科目）を実施する方法で運用していましたが、2008年度からは当該年度に開講する全授業科目を対象として実施しています。
- ・ 前期末、後期末の年2回、それぞれの期に開講されている専任、非常勤を含む全授業科目について実施。
- ・ 授業内容や進め方について学生の率直な声、感想、評価を収集するべく毎年アンケートを実施している。講義科目については各学年100名の学生を無作為に抽出し行う。アンケート対象教員は専任教員および非常勤講師としている。
- ・ アンケート実施対象から除外する科目を設けている。（受講生が10名未満の科目、複数教員担当科目、演習および実験・実習科目など）
- ・ 学生・教員への負担を考慮し、全科目について実施するのではなく、特定の科目（各教員の担当科目のうち、履修登録者数の多い1～2科目）について実施している。
- ・ 一時期に評価の実施が集中するため、学生が評価をいいかげんにすませる傾向が見られたことを踏まえ、同じ時期に行う評価授業の数を限定。以上の改革によって、学生が授業評価に真剣に取り組みやすい環境を整えると同時に、評価された教員が結果を授業の改善に活かすことができやすい制度になったものとする。
- ・ 前期及び後期のセミスターを1期間とし、その期間の途中でアンケートを実施する。担当教員にすぐに結果を返却することで期間内に学生にフィードバックすることが可能である点。
- ・ 各科目のアンケート実施時期が、重ならないように時期をずらして講義または実習中に配付、回収している。
- ・ 毎年、春学期と秋学期の授業最終週に実施。なお、ゼミや受講人数の少ない授業については実施しないこととしている。
- ・ 3年に一度、全学統一の形式で実施している。中間の2年間については、形式を各授業担当者が選択

できる。各授業担当者が、各学期担当している科目のうち 1 科目（演習科目を除く）について、授業評価を踏まえた授業改善へのコメントを書き公開している（毎年実施）。調査を希望する授業担当者に対して、3 年に一度全学統一形式で行う間の中間年に、年に 2 回（春、秋）実施している。

- ・ 授業開始 1 ヶ月後に「授業改善ミニアンケート」（自由記述式）を実施し、学生の要望を学期中に反映することができるよう工夫している。

② 入力方法

- ・ タッチパネル形式の入力システムおよび解析システムにより自動評価を行っている。入力システムは講義室前に設置しており 2 回以上講義を担当した教員各に、講義の最終日に入力を行っている。
- ・ web での実施に移行し、集計のスピードアップ、省力化をはかろうとしている。記述で前向きな意見を聴取しようとしている。
- ・ アンケートは全学共通であり、授業の内容・方法、受講の成果などの質問項目を「強くそう思う」の 5 から「全くそう思わない」の 1 まで 5 段階評価し、さらに各項目に自由記述する部分を有する用紙と 5 段階評価をマークするマークシートよりなる。
- ・ 学期途中でも web を利用して随時授業評価に関するアンケートを実施できる環境を構築しており、学生の意見を授業改善に即時フィードバックできる体制を整えている。各学部・研究科における独自の取組。web でのアンケートを行っている。アンケート結果をコンピュータ上で見ることができる。
- ・ 実施媒体（携帯電話活用＝過去に試行的に実施、web と紙の併用等）の工夫
- ・ OMR の回答用紙下部に自由記述欄を設け、切りとり線を入れ、即座に提出できるよう配慮している。

■ 質問項目に関する特徴

授業評価アンケートの質問項目に関する特徴として、①全学共通または授業形態別の質問項目の設定、②自由記述欄の設定、③学部や教員独自の質問項目の追加、④その他の質問項目の工夫等が挙げられた。

（回答例）

① 全学共通または授業形態別の質問項目の設定

- ・ 講義科目と語学・実習科目とに分けたアンケートを作成し、授業特性に応じた質問項目を盛り込んで学生の評価が的確に反映されるように工夫している。
- ・ 本学のカリキュラムでは、講義科目と実習科目があり、授業評価アンケートを実施する際に講義科目および実習科目に沿った設問内容で授業評価アンケートを実施しています。
- ・ 形態によって「講義、演習」「実技、実習」「学外実習」に分け、授業種別に応じたアンケート項目を作成し実施。集計も本学独自で行っている。
- ・ 平成 20 年度より、授業評価アンケートの基本設問項目を全学統一形式で実施した。設問項目を統一したことにより全学横断的なデータの収集が可能となり、全学部の状況把握もでき、授業改善のために全学で活用できるようにした。

② 自由記述欄の設定

- ・ 統計上の操作を優先するのではなく、自由記述部分を重視している。授業中などに個別に授業のあり方等を学生と双方向で協議しながら授業を進めている。
- ・ 授業開始 1 ヶ月後に「授業改善ミニアンケート」（自由記述式）を実施し、学生の要望を学期中に反映することができるよう工夫している。授業評価アンケートの表面に自由記述回答を配置することにより、学生のコメントを多く集めることができる。

- ・ アンケート項目に関しては毎年、見直しを行い、より授業改善に活かすことのできる項目がどのようなものなのかを考え、改良し続けている。アンケート用紙には学生による自由記述項目があり、その記述部分のすべてを各教員に返却しており、教員は記述部分をもとに自身の授業の改善に取り組んでいる
- ・ 自由記載欄に大学全体に対する意見（授業、施設等）の記入欄を設けている。

③ 学部や教員独自の質問項目の追加

- ・ マークシートに教員オリジナル設問欄を設けており、教員が学生に対して独自の設問を設定出来るようにしている。
- ・ 全学統一的な選択方式による設問 15 項目、自由記述 3 項目を設けている。加えて、学部、センター等において独自の設問がある場合、10 項目まで設問を追加することができる。（保健体育として適切な質問項目の追加など）。学部、学科等で実施のアンケートについて、全学的なアンケートとは別に学部、大学院などで、それぞれ授業評価アンケートを実施している。外国語の授業に応じたきめ細かいアンケートを独自に実施している。
- ・ 統一された質問項目とは別にクエスチョンバンクを比較的多く用意することで、それぞれの授業や受講者数、教員の個性にあわせたアンケートを実施することができる。
- ・ 全教員統一で実施する設問以外に、担当教員が学生に対し自由に質問できる項目を設けている。

④ その他の質問項目の工夫（内容の明確化など）

- ・ 各質問項目が何を改善するためのものかという目的意識が希薄であったことを反省し、1) 目的、2) 理解、3) 効果、4) 興味、5) 環境、6) 時間配分、7) その他という問う目的を明確にした質問項目の設定。
- ・ 授業評価アンケート結果について学長が個々の教員と面談して、授業方法の課題や、学生への対応の問題点の検討を行ない、結果として授業方法の改善につなげていくことを目的として、授業評価アンケートの設計を行なった。アンケートは既様式を改訂し 2 様式からなり、様式 1 は講義技術や学生の自己評価に関するもの、様式 2 は講義内容や教材・提示方法など講義そのものに対する評価に関するものである。
- ・ 特に本学の独自性といえるかどうかは不明であるが、質問項目には「授業」および「担当教員」の授業に対する熱意、教授法といった必要項目とともに、学生自身の授業に対する態度についても尋ねている。
- ・ 各学部毎に実施しており、アンケートの調査票に関しては、出来るだけ少ない回答項目、すなわち①回答者の受講態度、②授業の基本的要件への改善要求、③授業内容に対する評価、④授業へのレベル・スピードに関する要望、⑤自由記述に回答を絞り、その回答は選択肢に○印を付与する形式で、B4 版 1 枚にまとめた。これは、調査学期の講義終盤の授業終了間際 15 分間程度で実施するためである。

■ 結果に関わる特徴

授業評価アンケートの結果に関わる特徴として、①結果の分析、②結果のフィードバックおよび教員の対応、③結果の公開や他への活用等が挙げられた。

（回答例）

① 結果の分析

- ・ アンケート結果の数値部分を科目ごとに集計したものを専任教員分については学内で公開し、全科目の平均をとったものの経年変化は学外にも公開している。
- ・ H18（2006）年度より記名式とした。これにより成績層別に集計することが可能となった。具体的には優、良、可、不可ごとに集計した（成績を上位・中位・下位の 3 層に分けての集計も行った）。授

業を聞かない学生、授業を理解できない学生による授業評価に教員が左右されることは授業の質の低下を招くという批判が従来しばしば授業評価に対して指摘されてきた。成績層別に集計することによりこの問題は回避できる。少なくとも成績が良い学生の評価に対してはそのような批判は通用しない。したがって成績層別集計は教員が授業評価を真摯に受け止めることを促すことになる。また、成績の悪い学生がどのように評価しているかを知ることも授業改善に役立つはずである。

- ・ 独自の評価基準で充実度と満足度を数値化し、教員名、講義名と共に公表している。
- ・ 質問の全体平均点と各担当者（科目）の平均点を比較できるようにグラフ表示。

② 結果のフィードバックおよび教員の対応

- ・ 各学期に実施する授業評価アンケート結果について、一学期および二学期の集計結果を次学期授業開始までに全教員にフィードバックし、次学期より授業に反映できるようにしている。
- ・ アンケート書式は、共通質問項目とオプション質問項目、自由記述欄からなり、各担当者に科目別集計結果を報告し、集計結果に対する「所見」の提出をもとめている。
- ・ 学生の授業評価と教員の自己評価の分析結果を各授業担当者にフィードバックし、「教員自身のコメント」を求めている。この教員からの報告書の提出は、次年度の具体的な授業改善案の策定や、授業改善への意識の高揚を図ることを目的としている。
- ・ 本学の授業アンケートの独創的な点は、学生の授業改善の要求に教員がどのように対応するかを示す「リフレクションペーパー」の作成を義務化し、開示することにしたことである。すなわち、相互フィードバック・システムを初めて取り入れたことである。

③ 結果の公開や他への活用

- ・ 2003 年度より、実施結果とともに授業担当者のコメントを大学ホームページのイントラネット上で全面公開し、アンケートに答えた学生に自分たちの意見、要望が授業改善にフィードバックされているかを実感させ、学生と教員の信頼関係を深めることによって授業を改善し、学生満足度を高めている。
- ・ アンケート内容についての教員からのコメントを web で公開し、シラバスとリンクさせている。
- ・ アンケート結果は、集計結果として学科単位で統計結果を公表するほか、教員の自主性により、アンケート結果に対する教員のコメントを付記した詳細なアンケート結果を学内 web にて学生へ公開している。
- ・ 教職員間では評価結果を公開・共有している。FD 研修会、ワークショップ、公開授業でどの授業を参観するかなどに、参考にされている。
- ・ 結果は教員のコメントシートとともに各学部窓口で閲覧できるほか、ウェブコースツール上で受講生が閲覧したり、結果についてのディスカッションを行うことができる。なおセメスターの序盤には、全授業で受講生と授業改善について意見交換をすることとなっており、希望者は、授業アンケートと設問項目が連動した「インタラクティブシート」を提供している。

■ 回収方法、匿名性に関する特徴

授業評価アンケートの回収方法や匿名性に関する特徴として、以下に回答例を示した。

(回答例)

- ・ 各学期途中の授業時間中に専任及び非常勤の全ての教員が行い、授業担当者が回収する。
- ・ 学生の匿名性の確保のため、アンケートは登録学生数 2 名以上の授業で実施することとし、アンケート用紙の回収も学生が行うようにしている。
- ・ アンケート用紙は、担当学生が回収・厳封する。そのため回収されたアンケートは担当教員の目には触れない。

- ・ 学部によりアンケート内容を設定し、学部によっては記名式にして、正確な回答を求めるようにしている。

■ その他

その他の特徴、工夫として、以下に回答例を示した。

(回答例)

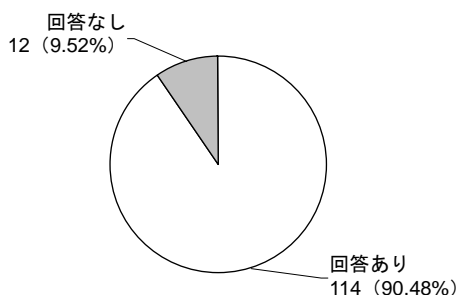
- ・ 実施率を上げるための方策として、アンケート未実施の場合は、理由書を書いて提出してもらうようにしている。
- ・ アンケート用マークシートの印刷、授業科目別仕分け及び集計を業者委託している。
- ・ 2007年度、名称を「授業改善アンケート」と変更して、「教員評価」とは無関係であり、「よりよい授業をつくるため」という趣旨を明確にした。全教員統一で実施する設問以外に、担当教員が学生に対し自由に質問できる項目を設けている。専任教員の他、非常勤講師による「教員アンケート」も実施し、学生の理解と教育環境・設備等の改善にも努めている。

2. 授業改善のための組織的活用

回答数 (有効回答 126)

回答あり 114 (90.48%)

回答なし 12 (9.52%)

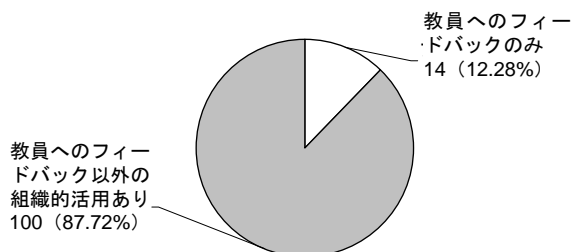


■ 組織的活用の有無

(有効回答 114)

教員へのフィードバックのみで組織的活用なし 14 (12.28%)

教員へのフィードバック以外の組織的活用あり (今後活用予定を含む) 100 (87.72%)



教員へのフィードバック方法について、以下に回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。

(回答例)

- ・ 教員への結果フィードバック：記名者以外の部分について、ローデータで教員にフィードバック。自分でクロス集計や他教員との比較が細かい設問でできるようにしてある。また、集計値については、結果の平均値だけでなく、分布も配布している。
- ・ アンケートの目的・内容等の説明は、FD 委員会活動報告の一貫として全教員を対象にした専任教員会議にて行い、周知徹底している。アンケート集計結果を教員個人毎に集計し、それに学年平均データを重畳して、個人データと平均との変位を明示し、改善努力の指標を与えた。
- ・ FD 委員会は、授業評価アンケートの結果を集計し、学生による授業評価と担当教員自身による自己評価を、各授業担当者にフィードバックしている。「学生評価得点」、「教員の自己評価点」、そして「学生評価の学内平均点」の3つを1つのグラフに表しているため、担当者は自己評価と学生評価のギャップを知ることができる。また、学内で自分の授業がどれくらいの評価を得ているのかを知ることが可能である。
- ・ アンケート実施後すぐに集計し、その結果を各科目後半回で即応してもらえるよう、できる限り翌週以降に担当教員にフィードバックしている。
- ・ 授業評価アンケートの結果について、回答期間が終了し次第、担当教員に開示している。即時開示は、web アンケートシステムを利用しているがゆえに可能となっており、授業終了から間もない時期にアンケート結果を確認できるため、授業改善により効果的に活用されるものと考えている。

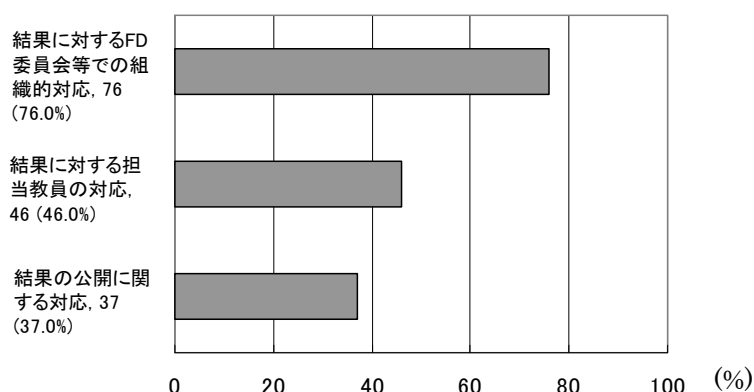
■ 教員へのフィードバック以外の活用方法

教員へのフィードバック以外の活用方法は多岐に渡っていたため、フィードバック以外の活用方法に関する記述を、以下の4点を基準に分類した。

- 結果に対するFD委員会等での組織的対応
- 結果に対する担当教員の対応
- 結果の公開に関する対応
- その他

なお、回答形式は自由記述のため、1つの回答が複数の基準に相当する場合もある。上記の4つの各特徴について下位分類と回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。

各基準の回答数（有効回答 100）



■ 結果に対するFD委員会等での組織的対応

授業評価アンケートの結果に対する組織的対応として、①FD 委員会や自己評価委員会、教育評議

会等での分析や検討、②学長や学科長による確認や指導、③研修会、ワークショップ、公開授業の参考、④評価の高い教員の公表・表彰等の記述がみられた。以下に各対応についての回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。

(回答例)

① FD 委員会や自己評価委員会、教育評議会等での分析や検討

- ・ 授業評価アンケートの結果を踏まえ、授業改善にどう生かしているかなどのアンケート調査を教員に対して実施し、FD 委員会で改善状況の把握、教員の授業改善に対する意識を高める。
- ・ 過去に、FD・SD 委員会でアンケート結果を分析し、物理的に授業をやりにくい教室の改修や授業人数と「私語」との相関関係により受講者数の改善を実施したことがある。
- ・ アンケート結果を「自己点検評価委員会」で検討するとともに、学部内に公開し、「教育実践支援室」にも結果提供している。
- ・ 学部、学科等で実施のアンケートについて 集計結果を拡大教授会で公表し、意見交換を行う。個々の講義の改善点への指摘があった場合、授業担当者はアンケートへのフォローを行ったうえ、提示された事項に対する回答・対応策を教育評価委員会に提示するものとし、これに基づき同委員会は、全教員を対象に各学期末（もしくは必要に応じて）開催される協議会において、講義内容のいっそうの整備・改善に向けての検討を行う。
- ・ 全学共通教育委員会において、受講者数の見直しのために授業評価アンケートを活用している。

② 学長や学科長による確認や指導

- ・ 各学科、センターの学科長及びセンター長等、役職に就いているものが非常勤を含めすべての教員のアンケートに目を通し、特に配慮すべき事由がある場面、その担当者と直接面談する。アドバイスを行ったり、問題の所在を確認しながら FD が実施されるように指導している。
- ・ 学長、副学長、学部長および FD 推進室会議構成員で閲覧し、学生の意見が極端な場合は対応する。また、評価結果を受け取った教員から意見を求めて、今後の FD 活動の実施に役立てることとしている。
- ・ 授業アンケートの結果、評価が著しく低かった教員に対し、副学長が面談を行っている。その結果、次期のアンケートでは評価が上昇する教員もいる。アンケートのまとめを部長会・大学評議会に提出し、そこでの議論を経た後、各学科レベルで議論して授業改善に反映させていく仕組みが構築されている。

③ 研修会、ワークショップ、公開授業の参考

- ・ 授業の内容及び方法の改善につながる全学的な教員研修を平成 20 年度から実施する予定である。具体的には、授業評価アンケートの結果を受けて、学年末に授業改善のための教員研修会を開催し、講演のみならず、各学部/学科別に分科会を行い、ワークショップ形式で当該年度の授業評価アンケート結果を点検、分析、評価し、その結果を「授業評価アンケート実施報告書」としてまとめる。
- ・ 担当教員に対して授業毎に結果を記載した集計結果を配布、教職員へ報告書を配布し、改善に役立ててもらった。(学期毎の活用)。FD 研究会として「授業評価について」という 2006 年度の授業アンケート報告をもとに教員間で討論会を実施した。学生の授業アンケート結果より授業方法の評価が高かった授業科目を 2 週間の公開授業として全教員に参観を呼びかけた。
- ・ 教職員間では評価結果を公開・共有している。FD 研修会、ワークショップ、公開授業でどの授業を参観するかなどに、参考にされている。具体的には、評価が大きく向上した教員の取組みを FD 研修会で取り上げた。私語等の授業秩序の維持を FD ワークショップで取上げた際に参考資料として用いられた。全学一斉公開授業の際に、評価が高い教員の授業を参観して参考にしたり、評価が低

い教員が他の教員の参観を請うなどの形で利用されている。

④ 評価の高い教員の公表・表彰

- ・ 授業に対して教員と学生の意識を高め、授業改善につなげることを目的に、アンケート結果より総合的評価の高かった教員を学内で発表している。
- ・ 学部によっては、教員表彰を行うための指標のひとつとして利用されている。
- ・ 得点上位3名の科目、並びに上位5名の教員を表彰し、賞状を授与する。得点が前年度と比較して0.5ポイント以上向上した中位から上の科目並びに教員を表彰し、賞状を授与する。

■ 結果に対する担当教員の対応

授業評価アンケートの結果に対して、担当教員は自己点検を行い、コメントや授業の改善案を報告するという回答が多くみられた。また、結果を授業にすぐ反映してもらい、結果について学生と意見交換を行う機会を設ける、結果に対する教員の意見を次回アンケートの参考にする等の対応もみられた。以下に、回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。

(回答例)

- ・ 担当教員は、学生からの記述意見等に対し、最終授業時まで自己の改善内容をフィードバックする。5段階評価は、学科単位で統計処理された結果を、大学ホームページに公開している。教員個人は集計された結果の主たる事項を整理して、学科長に報告し、取りまとめたものを平成20年度より学生が閲覧できるようにした。学生の意見等で特記すべきもの、学部共通の課題については、自己評価委員会で検討される仕組みになっている。
- ・ 授業評価アンケート結果を各担当者に報告し、アンケート結果に対する「所見」（感想と必要に応じた改良方策）の提出をもとめている。アンケート結果に対する「所見」の作成は、授業にかんする自己点検・評価活動の一環と位置付け、集計結果とともに冊子やwebで公開しており、授業改善に活かされている。
- ・ アンケートの結果はweb上（学内のみ）で公開し、各授業においては教員がアンケート結果を学生に報告し、それについて学生と意見を交換するフィードバックの時間を設けている。集計結果返却時に、教員を対象とした「学生による授業評価アンケート」についてのアンケートを行い、その意見を次回からのアンケート実施に役立てている。
- ・ 科目ごとの集計結果を教員にフィードバックし、結果を確認したうえで、教員の自己点検を実施する。全学的にFDに取り組むために、学生と教員が相互に授業を自己点検することで見出された課題を、教員間の意見交換や情報共有につなげていくことが目的である。以下の項目で点検を行っている。①学生の調査結果と、教員自身の判断との相違を点検のうえ、自己分析する ②授業で効果が上がっていること ③新たに取り組みたいこと ④教室・設備など学習環境についての建設的な意見 ⑤その他 提出後、FD委員会を通じ、話し合いの場を設ける。
- ・ 授業評価アンケート結果（18年度、19年度実施）を基に、「自己啓発シート」を作成し、教員自身の自己評価と学科コース全体としての総合評価を含め、学内報告書として纏めた。
- ・ アンケート結果を受けて各教員から寄せられたコメントの内容を、次年度の授業アンケートに活用している。

■ 結果の公開に関わる対応

授業評価アンケートの結果および教員の自己分析の内容を学内HPや報告書に公開し、教職員間や学生と情報を共有するという対応がみられた。公開方法は、web、報告書、広報誌、学内新聞、学内に掲示、図書館で閲覧等が挙げられた。以下に、回答例を示した。回答例は、記述のうち関連す

る部分のみを記載した。

(回答例)

- ・ 自由記述欄を除く授業評価アンケートの結果を学生に開示しています。(学内に掲示または学務課窓口において閲覧可能)
- ・ 全講義科目の 4 段階評価の集計結果として、設問項目別授業評価の全体平均、科目分野別評価平均、職種別評価平均、学年別評価平均、個人評価分布等を学内新聞に概要を掲載し、自己点検・評価の資料にも使用している。
- ・ 全体的な集計を学生へ掲示。また、個別の授業の集計結果についても、図書館で閲覧できます。アンケートの記述について、担当教員に点検書として、学生の意見に対する回答や感想を提出してもらっています。今年度より、こちらも閲覧するよう検討中です。
- ・ 授業評価アンケートの集計結果（自由記述を除く）及び各担当教員が記載した「アンケートの感想」、「改善対処した点」、「学生の自由記述に対するコメント」等は学生ポータルサイトにて当該科目を履修している学生に公表している。
- ・ アンケート結果の単純集計について、冊子化し、教職員に配布・アンケート自由記述欄について、本学 web 上で閲覧可能（本学教職員限定）・アンケート結果（集計・自由記述）についての教員コメントを本学 web 上で閲覧可能（学生も可）。
- ・ 授業アンケートの結果は、閲覧用冊子、web コースツールで公開を行っている。また授業アンケートデータより、全学的な傾向や分野ごとの特徴などについて分析を行い、「授業アンケート結果報告書」を作成している。学部・教学機関による分析を随時行い、次年度の開講方針等へ反映させるなど教学改善の取り組みを行うこととしている。これらアンケート結果からみられる学生の学習時間や授業におけるコミュニケーションの問題は、今後の本学における授業改善の重要な課題を示唆している。こうした授業アンケート結果を各学部・教学機関の教育理念や教育目標に沿ったカリキュラムのなかで、どのように授業改善に活かすのか、具体的な授業改善を図るために学部・教学機関の組織的な取り組みが必要となっている。
- ・ 授業評価アンケートの結果を担当教員へフィードバックし、アンケート結果を踏まえた授業改善の方法等について、担当教員及び学科等で検討し、報告書を作成し、学部長を通じて教務部委員会 FD 部会へ提出する。FD 部会は、学科等報告書を取りまとめた全学報告書を作成し、教育研究評議会の承認を得て、大学ホームページに掲載する。（個別報告書は、学内専用サイトに掲載。）

■ その他

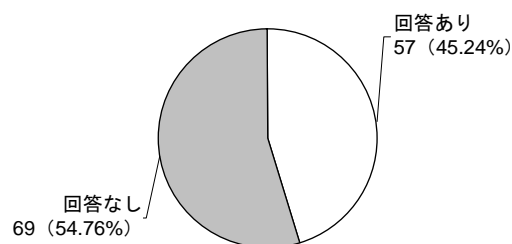
- ・ JABEE 等学外評価を受審する学部・学科については、各組織においての自己評価・教育改善等の PDCA サイクルの中で、授業アンケート結果を C（チェック）のひとつとして活用しています。
- ・ 組織的に活用するために、以下の項目を検討中。
 - ・ 授業アンケート結果の委員会内での情報共有
 - ・ 授業アンケート項目の改定
 - ・ 携帯電話を利用した授業アンケート実施の可能性
- ・ 他大学出身の大学院生を対象に行ったアンケート結果を教授会に報告し、授業方法や課題について検討した。また、定まった職業を有する者、出産・育児・介護等を行う者等を対象とした「長期履修学生制度」をつくり、2007 年度から施行した。

3. 授業改善以外の組織的活用

回答数（有効回答 126）

回答あり 57（45.24%）

回答なし 69 (54.76%)

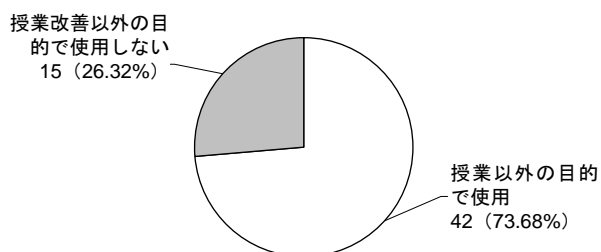


■ 授業改善以外の目的

(有効回答数 57)

授業改善以外の何らかの目的で使用 42 (73.68%)

授業改善以外の目的で使用しない 15 (26.32%)

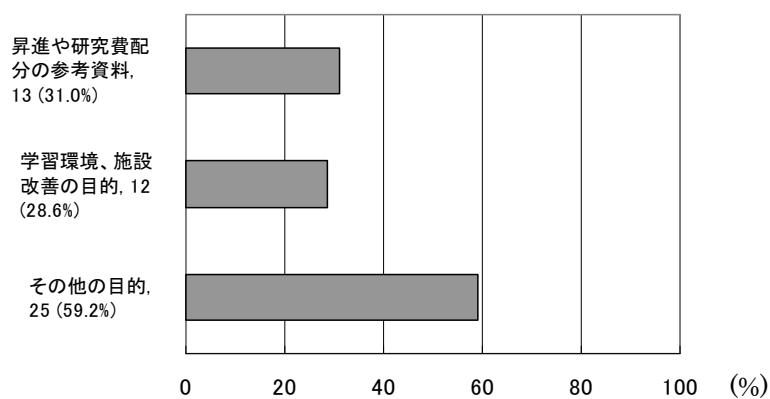


授業改善以外の活用方法を、目的別に以下の3点を基準に分類した。

- 昇進や研究費配分の参考資料
- 学習環境・施設改善の目的
- その他の目的

なお、回答形式は自由記述のため、1つの回答が複数の基準に相当する場合もある。上記の3つの各特徴について下位分類と回答例を示した。回答例は、記述のうち関連する部分のみを記載した。

各基準の回答数 (有効回答 42)



■ 昇進や研究費配分の参考資料

(回答例)

- ・ 年度ごとの大学教員評価（昇格など）の参考資料として活用している。
- ・ 学部により教員業績評価の一項目として活用をしている。
- ・ 教員評価制度が21年度から試行的に、22年度より本格的に実施予定であり、その中の教育評価システムの参考資料として、全学的に用いられようになる。
- ・ 本年度より実施されている学園全体の人事制度改革において、研究費査定の一部として講義アンケートの結果が評価されることになった。

■ 学習環境、施設改善の目的

(回答例)

- ・ アンケートに大学の施設・設備についての自由記述欄を設けており、そこに記入された学生からの意見や要望を関係部署に連絡し、改善に努めるようにしている。
- ・ 自由記述欄を分析し、教員の個々の授業スキル以外の要因による問題点の明確化を図っている。学習支援政策の立案、カリキュラム体系の改善のための一つの基礎情報として利用している。具体的には、学習支援室の整備などを行っている。
- ・ 自由記述に述べられた内容のうち講義室に関すること、教育機器等について改善の参考する予定である。
- ・ 設備・備品の整備。実習施設との検討、実習指導についての打合せに活用。
- ・ 教室の環境整備（部屋の規模・使いやすさ・視聴覚機器等）の要望等に対する情報として活用している。

■ その他の目的

(回答例)

- ・ 授業評価アンケートをどのように活用していくかについて、専任教員自らが「教員総覧」において自己点検評価の状況を記載するようにし、教育活動の履歴として平成20年度より公表する予定である。
- ・ FD 報告書を作成し、全学の教員に配布することにより教員個々の質の向上を図るとともに、大学全体の教育活動の推進に活用している。
- ・ 19年度からベストティーチャー賞制度を実施しているが、授業評価の結果を選考資料の一部として利用している。
- ・ 全学での平均値、学部での平均値をとり、経年変化を観察している。
- ・ 外部評価を行っていただいている研究科アドバイザー委員会に授業評価アンケート結果を報告して、意見を拝聴している。
- ・ 実施の結果及びその分析について、学内における広報媒体、FD の取り組みをまとめた年間報告書などを通して公開するとともに、FD 研究会と重ねることを通して、個々の教員の教授法の独自性について共通理解を図るとともに、教職員の対学生とのコミュニケーションを深めるきっかけとして組織的に活用している。